

宗安小歌集私註 (下)

北川 忠彦

三八

二二 しと闇におりやれ、月に現れ名の立つに。(30)

○閑吟集五七・小「卯の花がさねななめさいそよ、月にかゝやきあらはるゝ」

○三州田峯盆踊歌「月よ(夜恨めし暗ならよかろ、暗にや手も引く袖も引く」

二四 今日立つ明日立つ明後日立つ、森の巢鳥なふ、古巢を惜しむ俺かな。(31)

○三味線組歌補遺・祕曲(四)松虫「今日立つ明日立つ明後日立つ……阿部野の原で日を暮らす……」

○越後國綾子舞歌七・松虫おとり「きうたつあすたつあさでたつく、あべの原で日おくらす、そりやきけわ」

行脚の僧の通ふげな、名さい遊張りの籠笠が、これの門の脇の垣の、鍵にかゝりと懸つた、あら不思議や。(31)

(註) 舊訓「名さい遊張りの籠」で前後二歌に分つが一首とみた方がよくはないか。籠、笠、垣、鍵、かゝり、押韻。

籠笠―未詳。網代笠のこともあろうか、「守貞漫稿」二六・笠「我衣曰、古來所用の網代笠竹にて製す、遊にて刷き漆にて止め

たるもあり、多くは白也、僧の冠り物や、天和以來上方より下る物あり云々、守貞云今世も僧尼用之竹網代笠といふもあり」

○越後國綾子舞歌八・稻葉おとり「たれかかけたるこのかさお、たれかかけせるこのひやに、イヤ稻葉のとのかのかけたすろ」

一五 思はれ氣色して暇乞うたれば呉れたよ、乞うまいものを暇を。(31)

一六 若狹土産の皮草履、俺が履かずと思ふたものを、後妻がなふしやらりしやくと履く、面の憎さよ。(31)

(註) おもふたものを―原本「もの」の下に「ミ」印、その横に細字で「を」と記入あり。

一七 中／＼の空情、捨てられてよい物。(32)

○本書一八七に重出

一八 人は兎も言へ角も言へ、愛うしかろもな何としよぞの。

(32)

一九 じつと締めての愛うしさは、賀茂や春日野の野に伏す鹿の毛の数。(32)

○山本相模撰正本・五大力菩薩二「さもん、小ざくらが手を、じつとしめ……」

二五 北野の梅も吉野の花も、散りこそしよずろく味氣なや。(32)

○隆達小歌一三二「北野の梅も吉野の花も散る、君こゝろあれ」

二五 誰に馴るゝと我に知らすな、聞けば腹たつた山、顔に紅葉の見ゆるに。(33)

(註) たつた山——腹が「立つ」と大和「龍田山」の掛詞。

○隆達小歌二五三「誰はなるく我にきかすな、聞けばはら龍田山、顔に紅葉の散るに」

○隆達小歌一五五「君故にかかる浮名の立田山、もみち葉よたゞ色に出て」

○御船歌留上・龍田川邊「龍田川邊をわけ行は、顔にかほに紅葉の散かゝる」

○御船歌留下・三八もにうづもる「……浮名はよそに龍田川、顔に紅葉のちりかゝる」

○淋敷座之慰・のほくん節品々二三八「何とつめど色には出て、く、顔に紅葉が、く、散かゝる」

○大幣三・本手唱歌・しのび組「いよ思ふまいものそれほどに、顔に紅葉の立田山」(松の葉一にも)

○松の葉三・端歌(卅)涙川「浮名たつ田の山路ゆけば、顔にもみちがいよ散りかゝる、もみちがちりかゝる」

二五 逢ふて戻る夜はなふ花が候もの、逢はで戻る夜はなふ花も紅葉も見わけばこそ、俺は石川の濁らねどもなふ、人が濁

りをなふ掛うばなとしまらせう。(33)

(註) 「俺は石川の」以下別歌か、組歌と見得る。

○業平躍十六番一六「逢うて戻る夜はの、花が候も、逢はで戻る夜は、花も紅葉も見もわかぬ」

○舞曲扇林十・十六番小舞の事・(六)人こゝろ「あふてもどるよはのふ」

○落葉集一・古來十六番舞簫歌第七番逢て戻る夜「逢ふて戻る夜半の花が候もの、逢はで戻る夜はのサテ花も紅葉も見も分かぬ、我は石川や濁らぬとも、人が濁りを懸けふには、何と爲ん参らしよ」
○歌舞妓事始三・小舞唱歌・石川「逢(あふ)てもどる夜半の花も紅葉も見もわかぬ、われと石川をにこらねども、ひとがにごりをかけふには、何としまいらせふ」

○本朝醉菩提首巻口繪・出雲於國歌舞妓躍之圖「逢ふてもどる夜半の花が候逢てもどる夜半の花も紅葉も見もわかぬ、われは石川をにこらねども人がにごりをかけふには何としまらせふ・右は石川とて於國の時代にもはうたひつる小哥とさん、催馬樂の石川といふ名をかりもちひてことばをつくりかへたるものとおぼし」
○落葉集三十六「曾我五郎「我は石川や濁らねども、人が濁すよの、かけふには何としんまいらしよ……」

○巷謡篇上・安藝郡土佐をどり・石川「おれは石川にこりはせぬが、人がにこせばなんとせう……」

二五 松の葉五・法師「逢はで歸れば心の闇よ、月は牙ゆれど路見えす」
十七八はあさ川渡る、我妻ならうにや、負い越やそ。(33)

(註) 以下の一五四・一五五と続く連作。

○播磨波賀町(舊奥谷村)さんざか踊入淺川「十七八が淺川わたる、我が妻ならば負いわたせ。先ず負いわたせ、あの山かけがないかさて。あの山かけに若し人あらば、和御れが恥辱俺が恥」(但馬地方さんざか踊にも)

○日本歌謡集成山口縣南條踊・座免喜「ヤー十七八が浅川渡る、我妻なるなら、負ひ渡さう」。「ヤー先づ負ひ渡せん」、あの山蔭がん有る程になう「ヤー山蔭にんもし人あらば、そなたと我とは縁まかせ」

○その他この歌謡は、あるいは連作のかたちであるいは一五三のみ單獨で民謡として広く行なわれている。日本歌謡集成十二(但馬)によれば廣島縣安佐郡大踊・ゆり、同芦品郡平句歌、島根縣邑智郡盆踊歌・小をどりに類歌があり、但馬集・同拾遺にもまた多く見出され、主として播但から中國地方にかけて分布している。

○伊賀島ケ原雨乞踊歌・十七踊「十七八と道連れすれば、川を負い越し瀬を抱き越し、夏帷子がしよぼとなる」

二五 我妻なくとまづ負越やせ、あの山蔭がない事か。(33)

二五 あの山蔭にもし人有らば、我御料に縁がくなくないまでよ。

(33) とても立つ名に寝ておりやれ、寝ずとも明日は寝たと讃嘆しよ。(34)

○閑吟集二六九・小「おそばにねたとて皆人の讃談ちや、名はたつて詮やなふ」

○大幣三・本手唱歌・うき世組「とても立つ名に寝てござれ、寝ずとも明日は、いよ寝たと讃歎しよ」(松の葉一にも)

二五 雪の上へふ雨候よ、添へば心の消えくくと。(34)

○隆達小歌四六八「雪(イ雲)の上ふる雨候よ、名は消えぎえとく消えく」と

二五 そろりくんと殿は引くとも、浅葱小袴の襷はお大事。(34)

二五 又見て候憂き人を、うたふ寝の夢に。(34)

○隆達小歌四二二「又見て候憂き人を、うたふ寝の夢に」

二五 忍ぶまじ憂や辛や、何しに思ひ初めつらう。(34)

二五 我が心我に従ふものならば、かほど苦しき戀は無用と意見せうずもの。(35)

二五 あるは嫌なりなるも又嫌、思ふはならずさても由なや。(35)

○隆達小歌二六「あるは嫌なり成るもいやなり、思ふは成らずさてもよしなやな、なとせうぞの」

○朝來考「なるはいやなりおもふはならず、とおく浮世はまゝならぬ」

○長唄常磐津掛合・後の月酒宴島臺(文政十一年)「あるは嫌なり思ふは奈良の、木賃の宿さへまだ取れぬ」

二五 しやむとして唐崎や、松のつれなさく。(35)

(註) 松——「待」の掛詞。

○本書一四参照。

○自然居士「志賀辛嶮のひとつ松、つれなき人の心かな」

○謡曲拾葉抄・自然居士、「松につれなきとよそへたる詞は天神の御詠に『梅はとぶ櫻はかるゝ世の中に何とて松はつれなかるらん』はより松をつれなし草といへり」

○竹齋上・北野のやしろ参詣の條「梅はとふ(イひ)さくらはかるゝ」

世の中になんとしてまつは(イ)のつれなかるらん」

○慶安元年刊・天神本地上「梅はとひさくらはかるゝ世の中に、な
んとして松のつれなかるらん」

○巷謡篇上・安藝郡土佐をどり・しんじつ「志賀唐崎、松もつれな
やよき人や」

一六 縋子の袖細に伊勢編笠は、めす氣ぢやとのお召す氣ぢやと
の。(35)

(註) めす——着物を「召す」、我を「召す」の掛詞。

○隆達小歌二二「しゆすの袖細に伊勢編笠が、目すきぢやとの、
お目すきぢやとの」

一五 そと隠れて走て來た、先づ放さいなふ、放いて物を言わさ
いなふ。(35)

閑吟集二八二・口「あまりみたさに、そとかくれてはしてきた、
先はなさひなう、はなして物をいはいなふ、そどろいとうしう
て、何とせうぞなふ」

一六 浦が鳴るはなふ、憂き人の舟かと思ふて走り出て見たれば、
いやよなふ、波の打つ、うつゝ波の打つよの。(36)

一七 一夜二夜とも言はゞこそな、よしせめて朝顔の花の露の間
なりと。(36)

○隆達小歌三七六「ひと夜ふた夜といはばこそ、せめて朝顔の花の
露の間なりと」

○住吉物語「あさかほの花の上なるつゆよりも、はかなきものはか
げろふの……」(謡曲「鐘馗」にも利用)

一六 思ひは草の根か、さて憂やな、幾度切れど又萌え出づる。
(36)

○本書四七「思ひは是草根……」に類似

一七 餘所の梢のならひして、松に時雨の又かゝる。(37)

(註) 松——「待つ」の掛詞。

○隆達小歌四九〇「よその梢のならひ(イ)とて、松の時雨の(イ)
に、又かゝる」

一七 門に門ゑびを下いた。押さへたとなふく、例の又悟氣
奴が押さへたとの。(37)

(註) ゑび——海老鉾。

一七 篠を束ねつくがやうな雨に、夜く濡れて誰がおりやれと
の。(37)

○潮來風「篠をたばねてつくよな雨に、濡れて來たのにかへさりよ
か」

一七 身は破れ車、わが悪ければこそ捨てらるれ、思ひ廻せば心
憂しやの。(37)

(註) わ——「輪」「我」の掛詞。

○隆達小歌三七二「人はよいものとにかくに、破れ車よわが悪い」

○徳永種久紀行・あどくだり「さはいひながら小車の、わがわがわ
ろきをばうちすてゝ……」

○他我身之上二(三)「君にとがなやうらみはせまじ、やぶれ車でわ
がわるひ……」

○延寶三年書寫踊歌下・やよやぶし「人はよい／＼うらみはないが、

やぶれくるまでわがくるう」

○近松作・ひちりめん卯月紅葉上「我がよきに人の悪しきがあらばこそ、破れ車でわが悪い」

○海録一五六かたわ車と云小歌「匂ひ袋〔全部二冊、享保年間の刻本、男女子どもの縁を書たる教訓の書也〕云『古き小歌にうたふたるをきけば、君にとがなやうらみはせまじ、やぶれくるまでわがわるい』」

○今道念節一「戀の車づくし」……片輪車でわがわるい……」

○山家鳥虫歌・和泉八三「人は悪ない我が身が悪い、破れ車でわが悪い」

○中井艶庵・とはずかたり・白挽歌のよろしきは「人はとがなやうらみはせまい、かたわ車でわがわるい」

○鄙の一ふし三九三河國麥搗唄・白挽唄「人が悪いと思ふな様よ、破れ車でわが悪い」

三

又湊へ舟が入やらう、唐槽からろの音がからりころりと。(37)

(註)

唐槽——空槽とも思えるが唐槽からろであらう。

○関吟集一三七・小「又湊へ舟が入やらう、からろのをとがころりからりと」

○覺流傳右衛門派野中氏本狂言小舞集・唐槽からろ「詞」また湊へ舟が入るやら唐槽の音が〔節〕からりころり／＼と漕出いて釣する所に釣つた所がハア面白いよの」(原本未見。故笹野堅氏示教による)

○夫木和歌抄十二・雁・前中納言通房「さ夜ふけてうらにからろの音す也、天のと渡るかりにやあるらん」

三

米山藥師堂の釣鐘つりかねの緒にならふ／＼、三度さげられて振ら

れて拜おがまれうよ／＼。(38)

一五 君待ちて待ちかねて、定番鐘ちはんかねのその下でなふ、ちたゞ／＼ちたゞ／＼を踏む。(38)

○隆達小歌一五二「君待ちて待ちかねて、ちやうはん鐘のその下の、した／＼したした／＼を踏む」

しつぽと濡れたる濡れ肌を／＼、今に限らうかなふ先づ放せ。(38)

一七 幼顔おきなして鐵漿かねつけて、笑うたが猶愛いとし／＼。(38)

泣くは我、涙の主はそなた。(39)

○関吟集三〇七・口「なくはわれ、なみだのぬしはか(イそ)なたぞ」

○隆達小歌集三〇七「泣くは我れ、涙の主はそなたよ」

一八 鳥は哀れを知らばこそ、人の仕業の鐘ぞ物憂ものうれき。(39)

鳥あはは哀れを知らばこそ、人の仕業の鐘ぞ物憂ものうれき。(39)

一六 籠かごがな／＼籠かごもがな、浮名うきなを洩もらさぬ籠かごもがな。(39)

○関吟集三一・小「かごがな／＼、うき名もらさぬかごがななふ」

○松の葉一・裏組(六)簾組「竹がな十七八本欲しやな、浮名や洩らさじのな、籠に組も」

○延享五年小歌しやうが集五六六「小菜を摘むやら菜を洗ふやら、籠が漏るやら名を流す」

○日本歌謡集成・福岡縣星野の反哉歌・しちく竹「……うきなもらさぬかご(を)かきよ」

一八 閨洩きせつる月がちよぽと射いたよなふ、あら憎にくの月やちよぽと割いたよの。(39)

(註)「射いた」「割いた」掛詞

○大藏流茂山千五郎家狂言歌謠本文・よしの葉「……窓から月がぞがとさすはの……」(和泉流「狂言正本・別巻」よしの葉では「窓から月がく」とさすはの)

二三 等閑の程こそ恥づかしの、洩りなば洩りよ我泪。(39)

(註) 恥づかし「羽束師」、洩り「森」の掛詞。

○隆達小歌三三三「なほざりのほどこそ恥づかしの、もりなばもりよ我が涙」

二四 これより北の高き岡に、琴を調べて夜もすがら、不思議やなふ戀には寢られざりけり。(40)

○謠曲・現在江口(番外曲)「是より北のたかき窓、琴を調むる松の風、ふしぎやな戀にはねられざる物を」

二五 面白やゑん、京には車、やれ淀に舟、實に桂の鵜飼舟よの。

(40)

(註) ゑん・やれ——噺子詞。

○閑吟集六五・小「やれ、おもしろや、えん、京には車、やれ、淀に舟、えん、桂の里の鵜飼舟よ」

○覺傳右衛門保教本狂言・石神「京に車、淀に川舟、中なる道は神の通路」

○俚謡集・京都府加佐郡田植歌「面白や京には車、淀に船、淀には船、桂の川にや鵜飼舟」(同書京都府南北桑田郡・何鹿郡田植歌)

にも類歌多し。但し多くは「むかひ舟」と歌う)

二六 人の捨つるに辛の我が身や、思ひ切れとよ思ひ切られぬ。

(40)

二七 田舎人なりやとて何しに寝肌の劣るべきかなふ、お休みあ

宗安小歌集私註(下)

れ、富士の高嶺の寝物語する、するが面白。(40)

(註) 寝——「嶺」するが「駿河」の掛詞。

二八 中々の空情、捨てられてよいもの。(41)

○本書二四七に重出。

二九 なかくに又篠の小笹よ、一よ馴れても中々に。(41)

(註) 一よ「一夜」「二節」の掛詞。

三〇 身がな、一つ都に田舎にも又。(41)

○閑吟集三三・小「須磨や明石のさ夜千どり、恨く鳴許(り)、身がな、ひとつうき世にひとつ深山に」

○隆達小歌四二六「身がな、一つ都に田舎にもまた」

○御船歌枕・川万・有馬ふし「有馬出る時身をがな二つ、跡に置身と歸る身と」

○小歌志彙集附録・元祿正徳頃の流行歌・有馬ふし「有馬たつとき身もがなふたつ、跡におくみとかへる身と」

三二 とても消ゆべき露の玉の緒、逢は惜しからじ。(41)

(註) 逢は——「泡」の掛詞。

三三 隆達小歌二九〇「とても消ゆべき露の玉の緒、逢はば惜しからじ」身は浮草の根も定まらぬ夫を待つ、正躰あり明の月の傾く。

(41)

(註) 正體あり——「有明」の掛詞。

○閑吟集二〇五・小「身は浮艸の根もさだまらぬ人を待、正體なやなふ、ねうやれ、月のかたぶく」

○女歌舞妓踊歌・やくこ「身は浮草よ、根を定めなの君を待つ、去のやれ、月の傾くに」

一八 身な焦れそ、縁さへあらば末はさりと、(41)

○隆達小歌四三「身な焦れそ、縁さへあらば末はさりと」

一九 越後信濃にさら／＼と降る雪を、しや押し取りまるめて打たばや悋氣の人。(42)

二〇 俺は明年十四になる、死にせうずらう味氣なや、姉御へ申候、あねの思出に姉御の殿御が所望なのたゞ、一夜二夜は易けれど、奈良の釣鐘、よそへの聞へが大事ぢやのたゞ。(42)

(註) たゞ——足拍子か、閑吟集四四にも例あり。

二一 十五にならばまめの塙を弱ふせよ、今花ざかり、手折られいでは無興ぢや。(42)

(註) 舊訓「よばふせよ」

二二 大和撫子／＼、失さうにや／＼失さうにや。(43)

二三 情なかしな／＼に、情なかれかし。(43)

(註) つれなかし——「つれなかれかし」の誤りならん。

○隆達小歌二八五「つれなかれかしな／＼に、つれなかれかし」

二四 朱雀が川の千鳥が、夜深に啼いて目を覺ます。(43)

二五 死なばや、いや又死なじ逢こともあり。(43)

○隆達小歌一九九「死なばや、いやまだ死なじ逢ふこともあり」

二六 一心心、そがな人ぢやに、それやさうあらうず、そがな人ぢや。(43)

二七 物思ひよな／＼、中／＼情は物思ひよの。(44)

二八 待てとはそなたの空情心よ、いや待つまじや／＼。(44)

○本書二三に結句を少し變えて重出。

二九 衣の移り香、たゞ添ふ心。(44)

三〇 辛き別を願ず、又何時ぞの。(44)

○隆達小歌二八四「つらき別れをかへり見ず、扱いつよの」

三一 天に棲まは比翼の鳥とならん、地にあらば連理の枝とならん、味氣なや。(44)

○白樂天・長恨歌「……在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」

○幸若舞曲・伏見常盤「天にすまは比翼の鳥。地にあらは連理のえた。神ならはむすふの神、佛ならは愛染王。」

三二 不審ならば金打たう、金も無益や二心、たゞ振で知るもの。(44)

○隆達小歌三九六「不審ならば鐘打たう、いや鐘も無益たゞ振にて知るものを」

三三 五條わたりを車が通る、誰そと夕顔の花車。(45)

(註) 夕顔——「言ふ」の掛詞。

○隆達小歌一七四「五條わたりを車が通る、誰ぞと夕顔の花車」

○淋敷座之戀・琴の歌品々・須磨の曲一七二「深更に月呀へ車の音の聞ゆるは、五條あたりのあばら屋に夕顔をしるべに」

○落葉集七二五條車「五條あたりに車を通る、のほんへ、誰ぞと夕顔に、さんざ花車、花車くるま、のほんのほんへ」

三八 八重花よもの言へ、言え花よ、言はで色に出でんより言へ花よ。(45)

三九 笑うたも良ひが燦んだも良いよ、どう取り廻せども憎いと

は思はぬ。(45)

三〇 あゝ眞直な竹だにも、雪にもしと伏すものを。(45)

〇隆達小歌二四〇「竹ほど直くなる物はなけれど、ゆきく積れば末は靡くに(イカ)」

三二 憂き人は劉文叔、我は漢家の一客星、多年捨てられて、一夜はものゝ数かの。(46)

(註) 後漢書・逸民傳、「嚴光字子陵……會稽餘姚人也、少有高名、與光武同遊學、及光武即位、光乃變名姓、隱身不見、帝……令物色訪之、後齊國上言、有一男子披羊裘釣澤中、帝疑其光……遣使聘之、三反而後至……引光入、論道舊故相對累日……共偃臥、光以足加帝腹上、明日太史奏、客星犯御座甚急、帝笑曰朕故人嚴子陵共臥耳。」

三三 社頭の橋を誰が掛けつらう、中を反らいて。(46)

〇采女歌舞伎草紙繪詞・因幡踊「……誰か懸けつらう反の橋く、因幡のかの、懸けたげに候く……」

〇伊予國北宇和郡いさ踊歌・丹後踊九「丹後但馬のそり橋は、誰か掛たぞ中返り橋」

〇日本歌謡集成・山口縣・南條踊・走踊「ヤー住吉のく、(附)四社の御前の反橋は、誰がかけつる、中反にくく、トエーサー」

〇日本歌謡集成・徳島縣・盆踊歌・住吉踊、「住吉の四社の前なるそり橋は、誰がかけたよ、中ぞりに」「誰とうたか誰がかけうた、おれがかけたに、中ぞりにや」

三三 見ぬさへあるに、さて見てはの。(46)

三四 よしや辛かれ中く、に、人のよいほど身の仇よの。(46)

宗安小歌集私註(下)

〇閑吟集二一五・小「よしやつらかれ中く、に、人の情は身のあたよなふ」

〇隆達小歌四八五「よしやつらかれなかく、に、人のよい程身の仇よなう」

三五 兎にも角にも笑止なる人ぢや、此手柏の二表。(47)

〇隆達小歌二九五「ともかくにも笑止なる人や、扁柏の両面」
〇あづまめぐり・上「……あかねちぎりにならざかの、このてがしはの二おもて……」

〇落葉集二(五)鎌足道行、「此手柏の二面、何時か竝べん長枕……」
人は兎も言へ角も言へ、あ笑止と立つ名やの。(47)

〇采女歌舞伎草紙繪詞・しのびをどり「……あはれ霰がはらほろと降れがな、そのまにあ笑止(女歌舞伎踊歌「又笑止と」と立つ名、あ笑止と立つ名や……」

〇松の葉一・本手(六)忍組「……あはれ霰がはらほろと降れがな、その間にあゝ(大幣「あゝ」なし)笑止や立つ名や、笑止と立つ名や……」

三七 春の名残は藤款冬、人の名残は一言。(47)

(註) 款冬——「菱(フキ)」。

〇隆達小歌三五五「春の名残は藤薔躑、人の情はひとこと」

三八 忍ぶ細道茨の木、あ痛やなふ、思ひし君には逢いたやの。(47)

(註) 「あ痛や」「逢いたや」掛詞。

三九 戀の中川ふかと渡りて袖を濡らした、あら大事なやこれも君故。(47)

110

—

○俗耳鼓吹に天明五年藤枝外記と綾衣のことを記して「君とねやる

か五千石とるか、なんの五千石君とねよう」同じく「寧與レ君同レ

寢。將守_二五千石_一。徒見五千石。不_レ如_二一歡夕_一。

○日本歌謡集成・京都府丹波地方雜謡「君に添はうか五千石取ろう」

か、何の五千石君と添ふ」

右一卷宗安老對_レ予請_二此序_一。不_レ顧_二後覽之瞬_一。醉狂之餘爲_レ與_二騎竹年_一。戲任_二筆書_レ之耳。千耻一笑々々。

久我
有庵三休
押花

初句索引

ア
行

曉通へば

味氣ないものぢや

あちき花の下に

あなたのこなたの

あゝ山陰に
雨はさながら
あるは嫌なり
あはせけん人こそ
行脚の僧の
言へば世に經る
いかな類なき
いかな山にも

磯には住まし
愛しさがの積り來て
いとゞさへ物思ふ
いとゞ名の立つ折節に
いとゞ名の立つ不破の關
厭はるゝ身と
田舎人なりやとて
嫌と思へど

二三 色くゝの草の名は
七 色が黒くは
六 憂き人は劉文叔
五 憂き人を尺八に
四 鶯は音を出すに
六 宇治の川瀬の水車
一六 梅と震うとて
二七 梅は匂よ花は紅

望 六 三三 二 四 二八 三 哭

〔付記〕 本文の解讀には和田茂樹氏、註には淺野建二・吾郷寅之進・

小笠原恭子・眞鍋昌弘各氏のご示教を得た。お禮申上げる。發表後お寄せ下さった淺野氏よりのものは（上）に關する部分を一括して次に掲げさせていただく。（中・下）に關する部分も次號に掲載の豫定である）

なお（上）前書き中の「志田義秀」氏はいうまでもなく「志田延義」氏の誤りであつた。不注意の段深くお詫びしておく。

掲載を終えるに當り笹野誠氏に更めて感謝の意を表する。

序文二行 一聲こえ↓一聲こえ

五 寛永十二年跳記・三わけをどり「雨の降る夜も降らぬ夜も、門に

立つ□（とカ）の
みてつりごころ」

三 鹿兒島縣始良地方太鼓踊歌「茶釜竹かよ本伐り捨てゝ、うらに一節残るものいよ、身は霜枯れの葛の裏葉のきりぎりす、恨みてぞ居る、しんくやの」(「始良地方の研究」昭10)

三 當世小歌摘・平九本ぶし「菊のませがきゆひそめて、なか／＼今はなか／＼いまは昔こひしや身のうさを」

浦が鳴るはなふ
恨戀しや
恨み候まじ
うらみつくれば
恨は歎く
會者定離とぞ
越後信濃に
逢ふて立つ名は
逢ふて戻る夜は
幼顔して
思ひ切りしに又見えて
思ひ切りしに又見てよの
思ひ候もの
思ひは草の根か
思ひは是草根
思ふ方へこそ
思ふたを思ふたが
面白やゑん
思はれ氣色して
お寝れ音もせで
俺と和御料は
俺は小鼓
俺は明年

カ行

一六 歸る後影を
三 神ぞ知るらん
二 神むつかしく
六 變る人よりも
一〇 北野の梅も
五 衣の移り香
一三 君待ちて待ちかねて
七 君故に嵯峨野の奥なる
一五 君を待つ夜は
一七 今日立つ明日立つ
五 京の壺笠
三 霧か霞歟夕暮か
九 切りたけれども
一六 雲の涯まで
四 今朝の朝寝は
二 戀する人は
三 戀の中川
一八 黄金藏取らうか
一五 五條わたりを
二 御所折の烏帽子を
二 これより北の
二五 木幡山路に
一四

サ行

一〇 笹がな
(笠がこれの門の)
(四)

元 志賀の浦波
一 茂れ松山
二 ちたい都は
二 じつと締めての
二 じつと濡れたる
二 死なばや
一五 死にだにせずは
二 信太の森の
二 忍ぶその夜の
二 忍ぶ細道
八 忍ぶまじ
二 條を束ね
四 十五にならば
三 十七八の獨り寝は
一 十七八はあさ川
三 十七八は早川の鮎候
三 十四になる
二 霜枯の葛の末葉の
二 社頭の橋を
一 しゃむとして唐崎や
三 朱雀が川の
三 縹子の袖細に
三 盡期の君は
八 末の松山
三 住まば都よ
三 せめて時雨れよかし

タ行

四 詮ない思ひを
六 さうないこそ
三 袖を控へて
一 袖と隠れて
二 袖と締めて
一 袖と見てさへ
一 袖ろり／＼と
三
一 只今日よなふ
三 立つ名ばかりよ
一 誰か作りし
二 誰に馴るゝと
一 千夜も一夜も
一 月に啼き候
一 月夜には成候まじ
一 月を踏んでは
一 包むと仰るも
三 辛き別を
三 情なかし
一 天に棲まば
一 訪へば千里も
一 訪へば訪ふとて
一 訪へば消ゆべき
一 とも立つ名に
一 兎にも角にも
一 ともすれば

鳥は哀れを
取りよりや愛し

ナ 行

等閑の程こそ

なか／＼に又

中／＼の空情

中／＼の竹の籬垣

泣くは我

情ならでは頼まぬ

夏の夜の長さ

なに鎖いたる

何ともなれば

何を仰るも籠で候

涙の河の早きとて

な亂れそよの

浪の立つは風故の

ならぬ物故に

鳴る瀬も候

鶏は君民れとは

庭の塵にて

濡れぬ前こそ

閑洩る月が

ハ 行

花が見たくは

花を嵐の誘はぬ先

一七 春の名残は藤款冬
一八 一つ聞しめせ

人の小娘と

人の捨つるに

人の情のありし時

人の濡衣北時雨

人は戀し

人は兎も言へ：あ笑止と

人は兎も言へ：愛うしかろ

人は兎も言へ：立ちし其名が

一花心そがな人ぢやに

一夜來ねばとて

一夜二夜とも

獨り寝じ物憂やな

獨寝に啼き候よ

獨寝も良や

獨も寝けるものを

ひよめけよの

不審ならば金打たう

二人聞くととも

マ 行

又見て候

又湊へ舟が入らう

松に垣穗の八重葎

待つ人は來もせて

待てとはそなたの

三七 稀に近江の
二四 身がな／＼

身な焦れそ

見ぬさへあるに

身は浮草の

身は浮舟

身は宇治の柴舟

身は撥釣瓶よ

身はやりたし

身は破れ車

棕の枕にはら／＼ほろ／＼と

輝に着せうとて

武藏野にこそ

目もとに迷ふに

物思ひよなふ

物もおしやらぬ

門に門

ヤ 行

八重花よもの言へ

大和撫子／＼

寡鳥の羨むも哀れ

雪の上降る雨候よ

夢には來てお寝れ

夢よ／＼逢とな見せそ

夢よ／＼戀しき人な見せそ

宵のお約束

三三 よしさらば
二九 よしや辛かれ

二三 餘所の梢の

三三 米山薬師堂の

二九 世中は霰よの

ワ 行

三三 若い時はいや／＼

三三 我が思ふ人の心は

二七 我が戀は逢げうず

四四 我が戀は水に降る雪

二二 吾戀は水に燃えたつ

二四 我が心我に従ふ

二二 若狭土産

四四 我妻なくと

二七 我が待たぬ程にや

二九 笑うたも良ひが